

関東大震災からの復興に関わった助人と職人たち

—氷取沢の金子里吉の日記を読む—

岸上 興一郎

はじめに

今年は大正 12 年（1923）9 月 1 日に発生した関東大震災から 100 年にあたる。この震災は、関東全域、静岡・山梨にも及んだ。神奈川県西部では M 7.9⁽¹⁾ と観測された。地震後の火災によって、多大な罹災の爪痕を残した。全潰 10 万 9 千余戸、半潰 10 万 2 千余戸、焼失 21 万 2 千余戸（全半潰後の焼失を含む）、死者と行方不明者は 14 万人におよんだと伝える。房総方面・神奈川南部は隆起し、東京付近以西・神奈川北方は沈下した。相模湾の海底は小田原－布良（館山市）線以北は隆起し、南は沈下した。関東沿岸には津波が襲来し、波高は熱海で 12 m、相模で 9.3 m を記録した⁽²⁾。

横浜地域の罹災状況は、横浜市の調査によって、次表のように報告されている⁽³⁾。倒壊した建物の瓦礫は関内の浜を埋め、山下公園が築造され今日にいたっている。

	全焼(戸)	全潰(戸)	半潰(戸)	死者(人)	行方不明(人)	重傷者(人)
横 浜 市	62,608	9,800	10,732	21,384	1,951	3,114
久良岐郡	0	875	777	194	3	30
橘 樹 郡	128	4,829	6,699	1,835	93	431
都 築 郡	6	383	786	160	3	23
計	62,742	15,887	18,994	23,573	2,050	3,598

全市家屋建造物がことごとく倒壊、火の海と化し言語に絶する惨状を呈した。交通・通信機関は杜絶し、官公署も潰滅したため、人心動揺ははなはだしく、流言蜚語がさかんに流布した。

この報告は、昭和 28 年に公刊された。震災時には郡であった地域をも記述されているので、ここで横浜市の拡張変遷と、本論でふれる氷取沢の変遷を略記する⁽⁴⁾。なお都築郡は都筑郡、計は追加した。

横浜市 明治 22 年（1868）4 月 1 日 誕生

町村分合改称令 氷取沢は、久良岐郡日下村大字氷取沢となる。

横浜市 明治 34 年 第 1 次市域拡張 久良岐郡・橘樹郡の一部を合併

横浜市 明治 44 年 第 2 次市域拡張 久良岐郡・橘樹郡の一部を合併

※大正 12 年（1923）9 月 1 日 関東大震災

横浜市 昭和 2 年 4 月 1 日

第 3 次市域拡張 久良岐郡・橘樹郡・都筑郡の一部を合併

大字氷取沢は、横浜市磯子区氷取沢町となる。

氷取沢の金子里吉家

氷取沢の戸数は『新編武蔵風土記稿』には28戸とある。『横浜市史』には、明治1年に27戸、明治13年1月の岡本家文書『武蔵国久良岐郡氷取澤村戸籍簿』には、1番地から32番地が記され、内13番が宝勝寺・14と20と29番地が欠番となっており、28戸とされる。昭和49年の調査時では、ムラ内はシモ・カミに区分され、シモ12戸（1組7戸・2組5戸）、カミ16戸（3組6戸・4組5戸・5組5戸）の体制をもつ28戸であった。このように戸数の動きのない姿は地歴的にムラの経済面から、ムラ内の経済を維持するため、ムラ内に分家を出さないという概念が支配していたとされている。

確たるムラ組織を築いてきたムラが罹災した。金子里吉家（屋号：オケヤ）をはじめ屋号タナカ・ハンベエサン・シタヤシキのシモ4軒であった。

金子里吉（明治20年生）は、主屋罹災からの復興にあたって、その経過を日記に綴った。それは100年前の記録である。そこからは、にじむような彼の努力と、それを援助する伝統的なムラ人の「助人」の様を読み取ることができる。

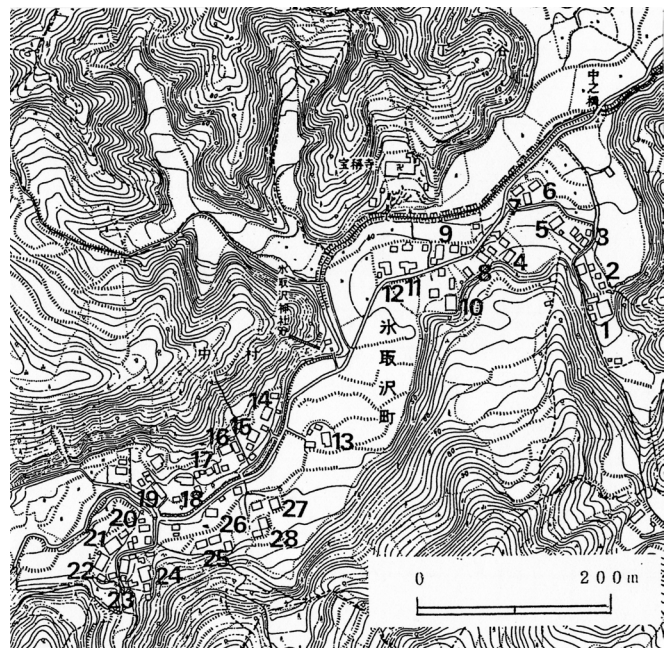
日記表紙には「大正14年1月 普請見舞助人帳 金子里吉」とある。

日記の書き始めは「大正12年9月25・6日 2人 富岡大塚 松9本の手間代3円外酒代1升1円20銭」とある。表紙の大正14年1月は後日の記入とかがえられる。推測するに「仕事士 大正14年2月13日 2人 打金拾円渡ス」とあるように職人の出入りと、諸経費の支払いを考えると、正月の年頭に筆を執ったのではなかろうか。

「普請見舞助人帳」の内容は、前半は再建に当たった年月日と助人名、それに資材の購入と仕事内容などが記され、後半は職人と助人の出入りと仕事内容をまとめると共に普請見舞としての金銭が記されている。普請見舞は割愛した。

ここでは後者の内容を前者の年月日に挿入した。それは主屋の復興建築に当たって、現場での助人のすがたなど稼働人数などをよりよく知るためである。

そのため、前半の記録には☆印を、後半の記録には★印をつけた。年月日などは漢数字をアラビア数字とした。月日の最初の日をゴジックとした。



第1図 氷取沢の集落（昭和33年）

大正14年1月 普請見舞助人帳 金子里吉

主家の建築は、イタクのアラキブシンといわれ、一代の大仕事であった。親類・地縁関係者から大黒柱寄贈の話をはじめ、工期中の助人など、多種多様な支援の声かけを受けた。主家再建は次のような流れでおこなわれた。

当主とサキヤマシとの間で建築される家全体についての話し合いが進められる。これを受けて、サキヤマシの仕事が開始される→崩壊した主家の片付け→仮住まい・大工の仕事場・用材置き場などの仮設建設→木材のヤマダシ→チョウナダテ→ツチモリ→ジマツリ→ジギョウ→コヤグミ・タテマエ→タテイリナオシ→ヤ

ネリ→カヤムジン・カヤカリ→屋根葺き→棟上げ式→造作→ヤウツリである。

以下、里吉の日記に従い展開していくが、その事柄の内容に関しては、逐次、長子の金子由雄（大正4年生）から聞き取り調査をおこない、可能なぎり地元の慣習を綴るようにこころがけた。

大正12年9月25・6日

☆2人 富岡大塚 松9本切 手間代3円 外酒代1升1円20銭

富岡の大塚は、里吉夫人に関係し、当主野本市五郎（炭焼き業）の持ち山に松林があった。梁材として松9本を伐採した。ムラ内には商店はなく、酒は日常では焼酎で、杉田に2～3軒の酒屋があった。

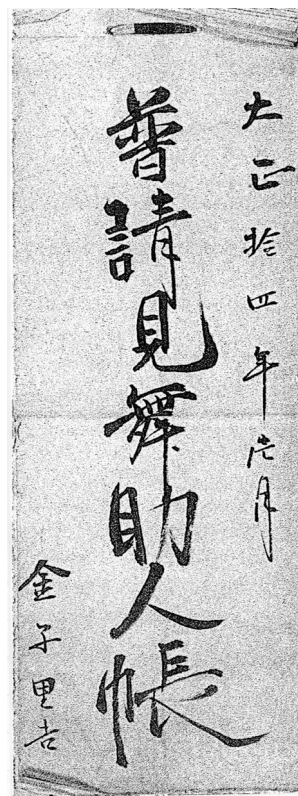
・サキヤマシ

水取沢の住環境は山林に囲まれ、各戸にはある程度の持ち山があった。昭和21年の第2次農地改革案施行後、特にムラでは753という言葉がはやった。それは山林7反・畑地5反・水田3反を所持することであった。特に山持ちになることであったという。

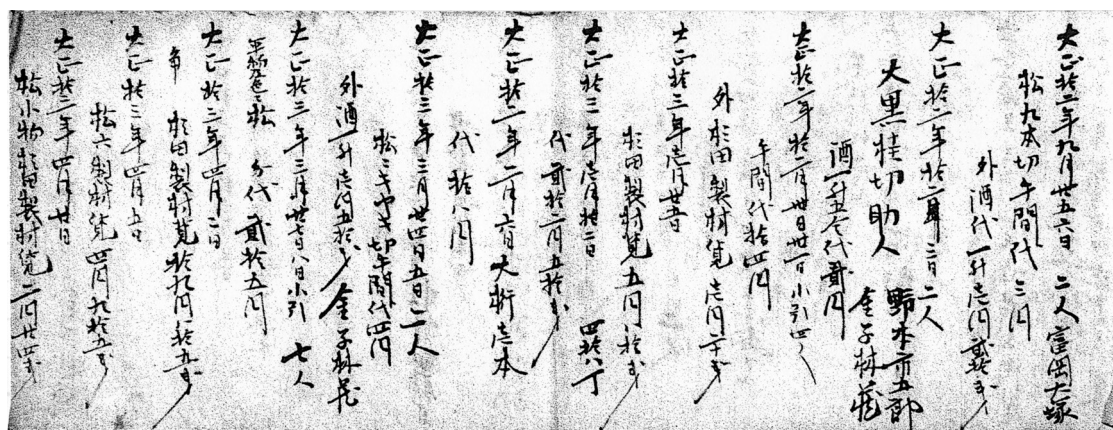
このような環境のなか、仲間内にサキヤマシの能力をもつ人がいた。その人は金子林蔵で、助人として家造りの全工程に関係し、助人の世話役をもする能力に長けた人であった。

サキヤマシの山入りは、暦をみてきめ依頼主と共に入山し、最初にノコをいれる木にお神酒を捧げ清め、自身もお神酒をいただき、伐採に取り掛かった。

金子家の持ち山は円海山の斜面地にあった。サキヤマシは伐採木の用途と搬出方向を計算しての伐採で、その技能はサキヤマシの能力を示す場であった。



第2図 大正14年『普請見舞助人帳』

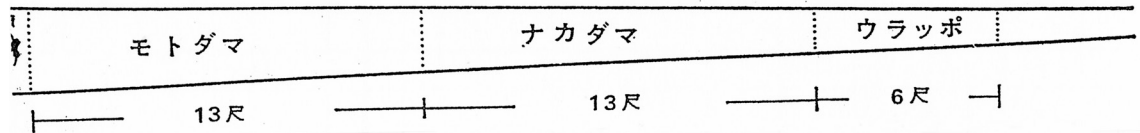


第3図 大正14年『普請見舞助人帳』の1頁目

サキヤマシの道具類は7寸ノコ・ヤ・クチキリ・カマ・メタテヤスリ・石油で、7寸ノコは直径3尺ぐらゐの木を楽に切ることができ、優れものの鋸であった。ヤは2種類知られ、1つはムクの鉄製、1つは芯は堅木材で両端を鉄材で細工していた。ヤは木の切り口に挿入し、木をネカス（倒す）際に使った。

クチキリはナタの一種で枝ばらい用であった。メタテヤスリは7寸ノコの切れ具合に応じて刃先を目立てした。石油は松を切ったあと、ノコについたヤニをふき取るためであった。

サキヤマシの1日の仕事量は、たとえば3尺の木が100本あるとすると20人分の仕事とされ、1日平均5本を伐採し、枝ばらいをした。時には第3図のように用材の寸法に挽く場合もあった。それは山からの搬出を容易にした。また製材所に急ぎ頼む場合でもあった。



第4図 用材の呼称（金子由雄解説・昭和49年）

杉を伐採した場合は、樹皮、つまり杉皮はぎをした。それは棟からの雨漏りをふさぐため、杉皮をフキグサ（カヤ）の下に敷きこんだからである。杉皮をはぎとる道具はスギカワハギと呼ばれ、首が長く、刃部の短いカマで、柄には柄尻から計って1尺3寸の位置に印しがつけられていた。それは杉皮の長さの単位であった。

・仮住まいと、大工の仕事場や用材置き場

9月下旬から12月上旬にかけての約60日間の記録がない。

この間には、農作業と仮住まいの準備など、次のような事が行われた。崩壊した主家の片付け、再建築する建物の図面、それに大工など職人を受け入れる仕事場、伐採した用材の置き場などに時間はついやされた。

仮住まいの建物ができると、まず神仏を搬入し安置する。次は日常生活で使用しないものを運び込み、最後は生活道具であった。

崩壊した家屋は、屋根無尽の仲間が助人の中心となって、まずクサヤネムギを開始し、畑の空き地にムキガヤを運び焼却した。骨組の解体は、再使用可能な材はまとめられた。当主は、それらの材の内、特によく残っていた材の1点を確保し、新築なる天井裏の材にあてた。これは家というものがもつ、継続の姿を示す観念と、とらえられていた。他の材は、大工の仕事場や用材の置き場の建築材として、さらには畑の小屋建て材として転用された。他は焼却された。

大正12年12月3日

☆大黒桂（柱）切 助人2人 野本市五郎 金子林蔵 酒1升5合代2円

大黒柱の材はケヤキであった。ケヤキ材は、少なくとも伐採後1年は雨にあてないように保管すると、自然乾燥によってアバレがでて加工の際、判断がしやすいと言われてきた。物置で保管したがムシがついたという。時にはケヤキのクルイを見込んで、速めにコビキに依頼して挽いてもらうこともあった。

野本市五郎と金子林蔵は、最初から最後のヤウツリまで助人として携わった。

・ヤマダシ

当主は、サキヤマシと山から材をおろす日時を相談した。100本の丸太をおろす場合、牛車3台を使って3日を要すると計算されていた。当主は搬出に必要な助人数を計算し、組内・親類関係者に声をかけた。当日は牛車・手車・ニナワ・ナタなどを準備して山に入った。まず製材所に運ぶ材から選

別した。

このような助人を得ての仕事の際には、当主は組内あるいは血のこい親類の女衆に調理・炊事を頼み、昼食にはオハチに飯とおかずを入れて現場に運び、夜は焼酎を準備して、その日の労をねぎらった。

・チョウナダテ

当主はチョウナダテの日を決めるため、隣接する峰の棟梁をたずねた。月日が決まると、組の仲間・親類などに声をかけた。当日は棟梁を中心にして焼酎を飲みかわし清めをして、建築工程を決めた。棟梁は材の選別を終えると、コビキヤ（木挽）・ソウマヤ（杣）に声をかけた。

コビキヤは主に鴨居・敷居用材を挽くためであった。コビキヤは、この当時では金沢に住まいの方であった。ソウマヤも金沢の人で、梁材の加工仕事を頼んだ。梁を下から見上げた際、ていさい良く見えるようにチョウナで加工する仕事であった。賃金は1日2人分とされていた。

大正12年12月30・31日

☆小引4人 外杉田製材賃 1円20銭

小引（木挽）の道具は、オオガ（オガ：大鋸）で、丸木を角材に挽いた。

製材所は、太平洋戦争前までは杉田の製作所に頼んだが、戦後には近場の栗木に製材所ができ利用するようになった。

大正13年1月12日

☆48丁代22円50銭（杉田製材賃か）

48丁はヌキ（貫）材と思われる。

大正13年1月25日

☆杉田製材賃 5円10銭

大正12（13か）年2月6日

☆大桁1本 18円

桁は、建物の柱の上に棟の方向に渡して、支えとする材。

大正13年3月24日5（25か）日

☆2人 松ニキヤキ（ケヤキ）切 手間代4円 外酒1升1円50銭 金子林蔵

大正13年3月27日8（28か）日

☆小引 7人 平物及色々松分 代25円

平物はシハチ（4寸8分）の厚さに製材した厚物の板材で、床板であろう。

大正13年4月2日

☆角 杉田製材賃 19円85銭

角は、主たる柱と思われる。

大正13年4月5日

☆松6 製材賃 4円95銭

大正 13 年 4 月 20 日

☆松小物 杉田製材賃 2 円 24 銭

〔註〕大正 13 年 4 月 21 日から 10 月 13 日まで記入がない。

金子里吉には新住居落成後の大正 15 年に綴られた〔萬日記覚帳〕がある。それを参考にすると、4 月 24 日にはムラ人共同で清戸川の水流をつかって稲の種あらいをしている。4 月 27 日には川から田に水を引くための堰を共同で築いている。5 月 7 日には、借地の富岡の田で田うないを始め、その後、数箇所の田での田うないが記録されている。さらに畑作、牛車を使っての人糞取りなど、野良仕事が記されている。

それらの諸仕事を鑑みると、家作は秋の収穫後に再開する予定とされたとされようか。なお、後述するが、家作中の大正 14 年 3 月 8 日には〔麦ざく 関彦太郎〕とある。麦秋に向かって親族の関家に助人を依頼していることが知られる。

大正 13 年 10 月 14 日

★桂（柱）切り 金子林蔵

大正 13 年 11 月 18 日 19 日

☆桂（柱）切手間 2 人 代 4 円 金子権蔵

里吉の持ち山で、柱用として 18 本切って準備をした。

大正 13 年 11 月 20 日

☆バタ代 23 円

バタは、製材所あるいは木挽が丸太を角材に挽くと出る残材をいう。良い材は神棚用に使われが、主に敷居や鴨居用などにあてた。

大正 13 年 12 月 9 日

☆上桂（柱）14 本 外松 2 本木代 80 円 20 銭

上柱は、いい柱を指し、一辺 4 寸 5 分（約 13.6cm）の柱とされた。

大正 13 年 12 月 12 日

☆4 分板 8 束代 30 円

大正 13 年 12 月 30 日

☆杉柱製材賃 29 円 75 銭

大正 14 年 1 月 16 日

★桁切り 金子林蔵（半）

（半）は半日仕事をさす。

大正 14 年 1 月 18 日

☆酒 1 かめ代 8 円 50 銭

酒 1 かめは、焼酎 1 かめである。

・ツチモリ（土盛り）

この日はツチモリ（土盛り）の日であった。その前段としてツチモリ用のユワを敷地内に搬入する必要があった。ユワはアオイシと称された泥岩で、通常はムラの中央を流れる清戸川から拾って準備していたが、今回は地震によって現在ネギ畑となっている所が山崩れし、ユワが露出した。このユワを1組7軒の人達がモッコでもって家に運んでくれた。その労のお礼に酒を準備し、飲食したという。

・ジマツリ

ジマツリの日、棟梁が大工小屋でのキグミの仕上がり具合をみて日にちを決めた。当主は神主と仕事師に行事日を連絡した。式場は、仕事師によって主家予定地の地霊を慰藉するために、次のように設けられた。中央に興玉神をまつり、四方には東に太鬼神、南に御気津神、西に太田神、北に底立神の四神を勧請し、その四隅に斎竹4本（マダケ）をたて、しめ縄をわたし、3ないし5の奇数のカミシデを下げた。

結界内に米1升・お神酒・塩三山、野のもの・海のものが供えられ、神主によって祝詞があげられた。参列した家主をはじめとする関係者は、順次、礼拝し、事なく無事に主家が落成することを願った。

・ジギョウ（地形：ユワを使用）

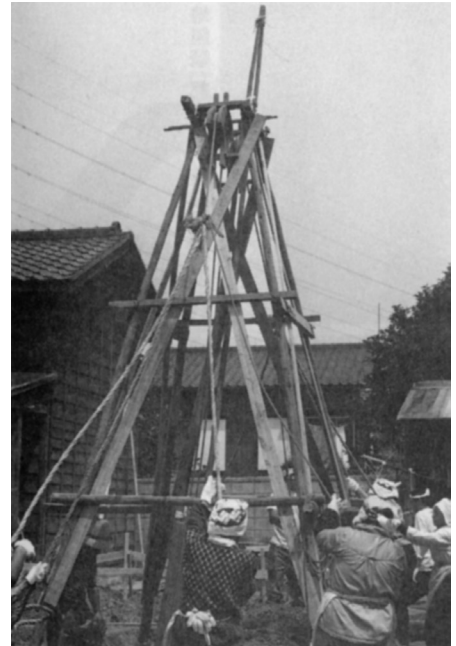
ジマツリの行事が終わると、棟梁は仕事師にジギョウの箇所、特に柱の礎石の位置を伝える。仕事師はその位置に地形用のヤグラ（ドンツキ：胴突）を組み立てる。ヤグラの規模は4人で移動可能なものであった。

ヤグラに取りかかる人数は、仕事師1～2人と助人7人ほどであった。

仕事師のキヤリあるいは《ネエサンの自転車にのればエンヤラエー》など、即興の仕事歌にあわせて、ヤグラに仕掛けられた芯棒（丸太）の綱の引きおとしを繰り返し、その打撃によって地面が十分に凹地となると、ユワ（泥岩）を加えながら、再度、突き、地面の凹地がなくなるまで打ちつづけた。

仕事師はユワが少し盛り上がった段階で打ち上がったと判断した。それは礎石を据える際の高低差をユワの厚さで調整し、水平を求めたからである。

礎石はタマイシと称され、据える仕事は、新規な気持ちでするのだとされ、地形の翌日の仕事とされた。



第5図 ヤグラ（ドンツキ：小泉弘生家：東山田・昭和51年）

大正14年1月28日

☆小引（木挽）11人代 11円

木挽の延べ仕事日11人分を支払った。

大正14年2月12日

★梅ノ木ホリ 金子林蔵

金子里吉夫人の実家は炭焼屋であった。主家再建場所に植わっていた梅の木を金子林蔵と2人で掘り

起こし、夫人の実家に提供した。

梅に関しては、江戸時代から有名だった杉田の梅林の影響を受けた地域であった。

里吉家は梅林を所有し、花と実の出荷をしていた。

大正 14 年 2 月 13 日

☆ 2 人 打金 (内金) 10 円

仕事師への支払い。

大正 14 年 2 月 18 日

☆ チョウナダテ

金子林蔵買物 魚代 5 円 90 銭 醤油代 2 円 5 銭 そば打代 1 円

チョウナダテ (手斧立) は、大工が新たな建築にとりかかった最初の日に行う儀式であった。

その式のため、金子林蔵が儀式に必要な品物を買出しに杉田に出掛けた。

ソバ打ちは、ソバ粉を持参して打ってもらった。代金はソバ粉の量に応じた料金であった。

組の者は、主家予定地で、1 月 18 日に運びこんだユワの [土モリ] の仕上げ仕事をおこなった。

★ [土モリ]・[チョウナダテ] の助人

金子金蔵	金子林蔵	小泉藤吉	金子定悟郎	金子権蔵
金子権治郎	岡本喜代司			



第 6 図 杉田村梅園 (部分)『江戸名所図会』市古夏生・鈴木健一校訂 ちくま学芸文庫 1997 年

大正 14 年 3 月 1 日

☆ 桁ハリヨセ 酒 1 升 1 円 50 銭 バット 60 銭 カツグ人ニヤル

桁ハリヨセは、ケタ (桁) とハリ (梁) を接合する仕事で、体力が要求された。

バットは GOLDEN BAT のことで、加太こうじの記録によると [大正 14 年 1 箱 10 本入り 7 銭]⁽⁵⁾ とある。

★ ケタカツギ (桁) の助人

金子金蔵	金子林蔵	小泉藤吉	金子定五郎	金子権蔵
金子権次郎	岡本宗吉	岡本庫二	岡本喜代司	

大正 14 年 3 月 2 日

★ ケタミガギ (桁ミガキ) 金子林蔵 大工 5 人

円海山にあった所有林の杉を伐採し、1 週間ほど寝かした。その後、4 点担ぎで (8 名) で家まで運んだ。これをケタカツギといった。

ケタミガキは、杉皮を注意しながら剥ぎ、その面をモウソウチクを裂き作ったタワシでこすりアマカワをとる。さらにモミヌカを晒し袋に入れ、水をつけながら磨くと、木のもつ液材が取れる。これは木の導管を除去する作業である。

杉皮は屋根棟材の防水材としてクサヤネの棟の下に敷かれた（頁 68 参照）。

大正 14 年 3 月 3 日

★地業（地形）のユワ（岩）出し 土モリ

金子権蔵 酒巻太吉（親族） 大工 5 人

前述したように、地震による崩落によって地表に出たユワ、俗に言うアオイシを地形のために主家建築予定地へ搬入した。

大正 14 年 3 月 4 日

★大工 7 人

大正 14 年 3 月 5 日

☆立前（建前）の酒 打金（内金）50 円 酒 1 かめ・もろみ 1 升代 12 円 30 銭

建前の準備にとりかかった。酒は清酒で伊勢佐木町の酒屋から購入。日常の酒は焼酎。供え物は、カモジ・カガミ・クシなどであった。

★大工 7 人

大正 14 年 3 月 6 日

★大工 6 人

大正 14 年 3 月 7 日

☆忠さんヨリ材木代 38 円 20 銭 大ヌキ 18 丁代 10 円
土台石 12 代 8 円

忠さんは、野本材木屋の方で、ヌキ（貫）材を買った。

土台石は、現在の鎌倉市今泉に産した今泉石をつかった。今泉の位置は氷取沢の西南に位置し、その間には円海山などの山並みが位置する。小屋無尽参加者全員の助を得て、テグルマや牛車で氷取沢から北上して、上大岡→鍛冶ヶ谷→今泉という道程で、石を求めに行った。

★大工 3 人

大正 14 年 3 月 8 日

★麦ざく 関彦太郎（親族） 大工 5 人

麦ざくは、麦秋に向かって、麦畑のミゾやウネをクワでもって打ち返す野良仕事のこと。金子家が、家作のため十分な手がなく、親類の関家が麦畑の助をした。

大正 14 年 3 月 9 日

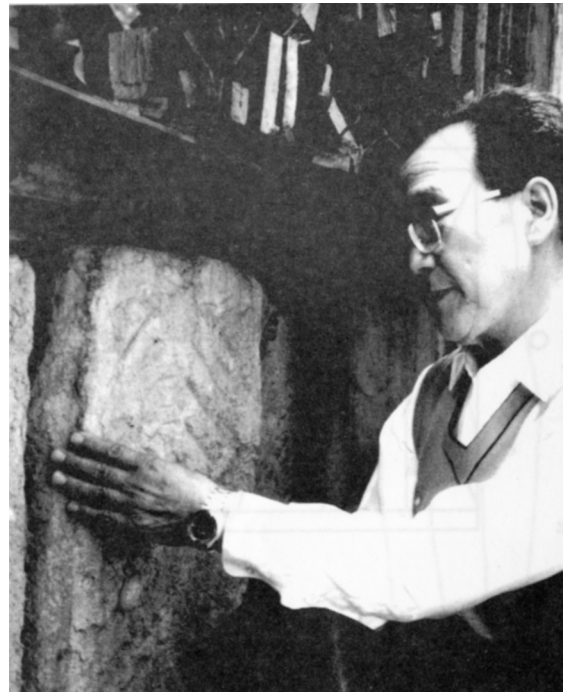
★大工 7 人

大正 14 年 3 月 10 日

☆地祭禮（地鎮祭） 1 円 50 銭（先達へのお礼）

1 月 18 日のジマツリに類するマツリをした。

★大工 5 人 仕事士 7 だ 5 人（不明）



第 7 図 イワをさわる小泉由蔵（今泉・昭和 60 年）

大正 14 年 3 月 12 日

★地業（地形）と助人

12・13 日は、主屋建築予定地への土運びと土盛り仕事であった。

助人

岡本長四郎 岡本栄次郎 金子信太郎 岡本吉蔵 金子直左門 野本六三郎
甘和竹次郎 野本市五郎 酒巻太吉 仕事士 1 人

大正 14 年 3 月 13 日

☆投モチツキノ買物 1 円 丸太 80 本代 15 円

丸太 80 本は、新築中の主屋を囲む足場材で、草屋根葺きの際にも使用された。

★地業（地形）と助人

金子金蔵（2 人分） 小泉藤吉 金子定五郎 金子権蔵 金子権次郎
岡本長四郎 岡本喜代司 酒巻太吉 仕事士 2 人

大正 14 年 3 月 14 日

★地業（地形）と足場カケの助人

岡本馬五郎 金子信太郎 岡本吉蔵 金子直左門 野本六三郎
甘和竹次郎 野本市五郎（地形ノ足場カケ） 大工 半人 仕事士 2 人

大正 14 年 3 月 15 日

☆釘代 8 円

★大工 7 人

3 月 16 日

☆立前の買物代 35 円 20 銭

★立初（タチハジメ）

地業（地形）によって、打ち固められたユワ（アオイシ）の回りに玉石を敷き、今泉石を据え、中心柱である大黒柱とニヤコ柱を据える仕事をさし、コヤグミの開始である。

・コヤグミ

棟梁はコヤグミの最初の仕事として、主屋入り口の土台すえにとりかかった。土台の材は堅いケヤキがよく、普請見舞いとして、コイ親類から贈られる例が多かった。

仕事師は、[3 月 13 日丸太 80 本] とある足場材を使って主屋周囲を取り囲むように組み建て固定する仕事を開始していた。

棟梁は土台すえが終わると、大黒柱を中心としてニワに面する他の 3 本柱、計 4 本にウスバリをし、柱が真っすぐに建つように修正した。棟梁は次に仕事師と助人に指示し、柱・梁などの各用材を組み合わせ、屋台骨を組みをはじめた。

助人

金子権蔵 岡本庫二 岡本喜代司 野本市五郎 高梨留吉
大工 7 人 仕事士 2 人

3 月 17 日

☆醤油 祝儀投金（銭）代 38 円 70 銭

記述はないが、[タテマエ]の行事日。

★タテマエの参加者

金子金蔵	金子林蔵（2人）	小泉藤吉	金子定五郎	金子権蔵
金子権次郎	岡本長四郎	岡本宗吉	岡本庫二	岡本喜代司
岡本栄次郎	岡本馬五郎	金子信太郎	岡本吉蔵	金子直左門
野本六三郎	甘和竹次郎	野本市五郎	酒巻太吉	
<以下、親族など>		中田力蔵	友井庄次郎	栗木：鈴木定吉
間門：高梨留吉	石川中村橋：渋谷要之助		大岡川：鄺殿三郎	
大工 7人	仕事士 4人			

・タテマエ

戸主は、タテマエ祝いの準備にとりかかった。親類はじめ組の者は、おそくともタテマエの前日までに、タテマエ祝いを心配して何を贈り物にしようかと、話し掛けてくれた。これはムラの慣習によるもので、コイ親類はナゲモチ、ウスイ親類はコアメシ（おこわ）と決まっていた。コアメシは、蓋つきのウマズケオハチ（直径約 50cm、深さ約 25cm）に入れて届けられた。その容量は米 1 斗であるが、慣例として 2 升多く入れ蒸された [1 斗 2 升] のコワメシであった。

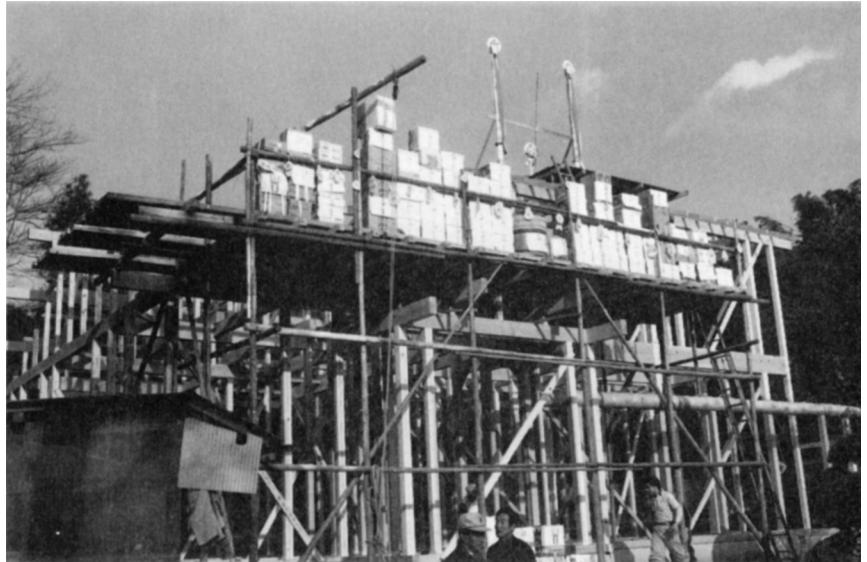
ウマズケオハチは、ウマズケオハチ 2 鉢と、小形のオハチ 1 鉢の計 3 鉢を一式として使用するのが本来の使用方法であったとされている。

〔赤飯半だ〕はウマズケオハチ 1 鉢、〔こわめし 1 だ〕はウマズケオハチ 2 鉢をさす。戸主は届けられる品の量を検討し、足りない品物の準備にとりかかった。ナゲモチが不足している場合には、1～2 俵の餅米を準備して、組の者に搗いてもらった。

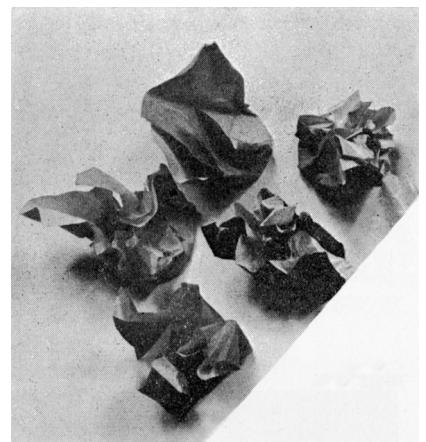
ナゲモチ用のモチが搗きあがると、トリコを付けながら厚さ 5cm の伸し餅とする。モウソウチクの稈を同寸法ほどに輪切りにし、その輪の先端部を鋭利に削り、それで円形のナゲモチを抜きとった。菱形状に残った餅は、次の臼の搗きおわり頃に入れて搗きあげた。最後の臼での残りは丸餅とした。

紅白の割合は、3 対 7 ぐらいであった。餅の表面には文字は書かなかった。

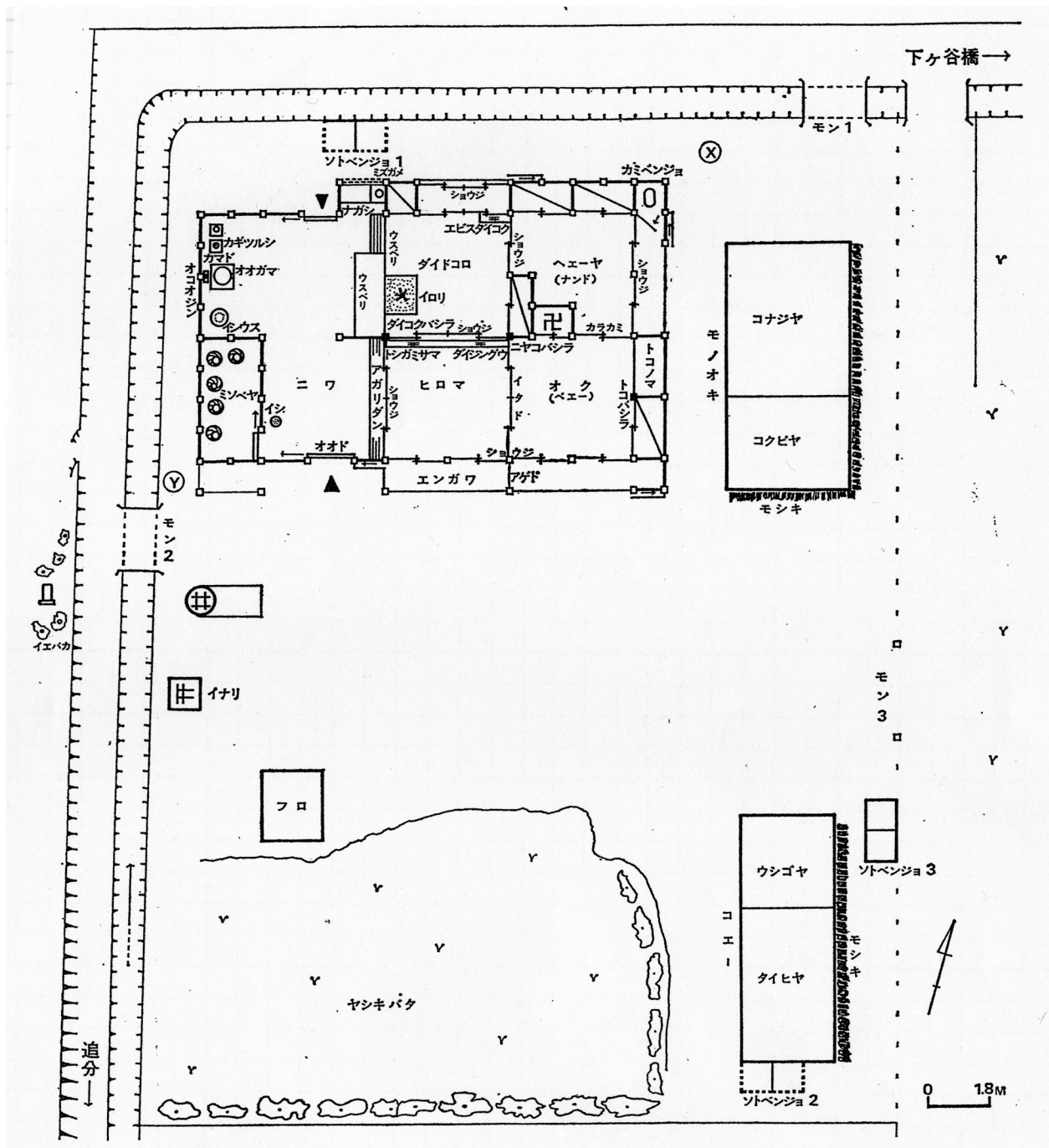
コヤグミが終わると、タテマエの準備に取りかかる。棟には助人がマダケとホソナワでつくった弓と矢を北の方位に向けてたてる。ヘイグシは 5 本で奇数の本数を立てた。ムネフダは 3 寸角材に麻と



第 8 図 建前の田丸清家（池辺・昭和 60 年）



第 9 図 ナゲゼニ
（金子由雄家・昭和 49 年）



第10図 大正14年～昭和44年間の金子里吉家（金子由雄解説・昭和49年）

カミシデを付け、棟に飾った。ムネフダは後にカヤ棟を造っている際に棟材に打ち付けた。ナゲモチ7鉢・オスワリ・米1升・お神酒・塩・投銭を足場材の一角に設けた祭場に供えた。投銭は赤色にぬったサクラ紙に5銭を入れて、おひねり状にした。

棟梁・仕事師・戸主・家族・コイ親類・組の者が祭場にのぼる。まず棟梁が白のナゲモチ3個にオミキをかけ、祝詞をあげる。そして北南東西の順にモチを1個ずつ投げる。登壇者全員で清めのオミキをいただく。

次いで投げ銭・投げモチとなる。投げ銭は、この家が全ての面でゴエンがありますようにという意味

で、一番最初に投げられた。この銭を拾った者は、縁起のよい銭だから、金がでないように（浪費しないように）、あるいは銭が増えるといって蝦蟇口にいった。

ナゲモチの段になると、戸主の関係者も棟にあがってモチを投げはじめるが、奇数の人数とされた。割れる偶数は縁起が悪いとされていた。

これらの儀礼の後、タテマエの宴がコヤグミの中で催された。ムラの子供たちへは紅白のモチをおくる慣習があった。棟梁はじめ関係者には13個のモチ（紅3・白10）がおくられた。このモチは、親類の老人たちが半紙に包み準備した。棟梁はじめ木挽・ソオマヤのみなさんにはヘイグシとオスワリが贈られた。

3月18日

★タテイリナオシ

立前（建前）の後、タテイリナオシといって、棟梁はコヤグミ全体を見て回り、柱のイガミ（歪み）などを修正していった。この後、屋根ふきの準備となる。

助人と大工・仕事師

金子金蔵	金子林蔵	金子権蔵	岡本宗吉	岡本喜代司
大工 6 人	仕事師 1 人			

3月19日

☆製作賃代 2 円 40 銭

★大工 7 人

3月20日

☆大工打金（内金）300 円ヤル

★大工 7 人

3月28日

★ヤネリ（家根り）

ヤネリは、草屋根の下地を組み作る仕事である。まず大工が柱の頭部に固定されたモヤの上から棟に向かって、タルキを6尺間隔で釘で固定する。その上に棟に平行になるようにヤナカ（丸太またはマダケ）を2尺5寸の間隔で置き、ワラナワで縛り固定する。

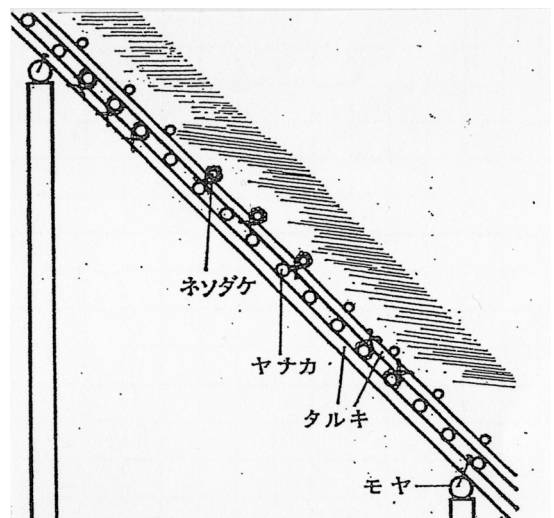
ヤナカの上に丸太あるいはマダケをタルキ材として4～5寸間隔に並べホソナワで縛って行く。さらに棟に平行になるようにネソダケあるいは裂いた竹を4寸間隔におき、ナワでからげながら固定する。

これによって屋根の下地はできあがる。

次いで屋根葺き材の準備を経て屋根葺きとなる。

助人と大工

金子林蔵	金子権蔵	岡本喜代司
岡本吉蔵	野本市五郎	関彦太郎
大工 2 人		



第11図 ヤネリ（金子由雄解説・昭和49年）

・クサブキの材料

当地の〔四つ間型〕（田の字型）の平均的屋根葺き材料と量はつぎのようである。

カヤ：350 ダン コムギのカラ：200 パ

ナワ：150 ポ ホコダケ

アカナワ：3 ポ 杉皮：20 ワ

カヤの単位は最小単位はコタバで、両手で握り締めた約径10cmの束である。4コタバ＝1ワ、4ワ＝1パ、6パ＝1ダンと計算された。

ナワはフトナワのことで、各戸2ポ（3尺＝1ヒロ、20ヒロ＝1ポ）を提供した。1ヒロは通常6尺であるが、ここでは3尺とされていた。不足の量は無尽を受ける家で準備することになっていた。ホコダケはフキグサを押さえる竹。アカナワはシュロナワのこと。

杉皮は、無尽を受ける家で準備した。杉皮の単位は、長さ1尺2寸、横幅6尺の面を1ワと称した。

・カヤムジン

クサヤネを葺く主たる材料はカヤである。

カヤ場は、シタ・ウシロヤマ・オイセサマ・オオヤトと称されたムラの共有地4か所にあった。その管理は、カヤ場には雑木がよく生えた。それが遠目にスズメの足のように見えたので、スズメネッコと称してトンビ（鋏）でもって掘りおこし、始末したという。

前述したように、ムラ内はシモ（1組7軒・2組5軒）とカミ（3組6軒・4組5軒・5組5軒）で構成され、カヤ無尽を受ける家は順番にシモ・カミから各1軒が選ばれ、年内に通知されていた。2軒の間で葺き順の先番か後番かを定める約束となっていた。このカヤムジンは、昭和37年頃が終焉期であった。

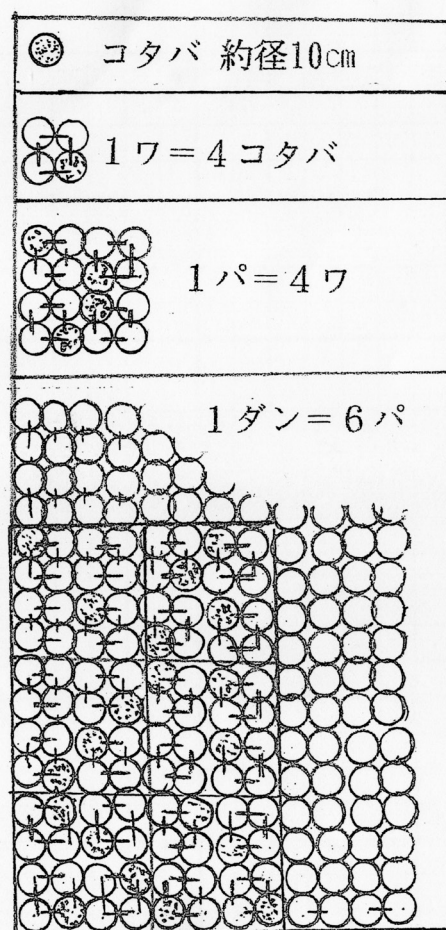
大地震で罹災した4軒には、ムラは特段の対応をとった、と伝えられている。

・カヤカリ

カヤカリの日は、正月上旬があてられ、通常、正月5・6・9・10日の4日間で、1日1カヤ場での仕事であった。カヤムジンの終焉期頃のカヤカリは、正月5・6・9日の3日間となり、3日目に残り2か所のカヤを午前と午後に刈ったと伝える。

カヤカリの日は、必ず各戸から1名が参加し、カヤ場に午前8時頃に集合した。道具はソウジガリカマとトイシ、ショイバシゴであった。

食事は居住地近くのカヤ場の際は、家に帰って食べた。遠方のカヤ場の場合は、重箱に飯4合と正月料理のニマメやキンピラなどを入れ、ヤマベントウとした。ハシはネソダケを切って使ったが、食後そのまま捨てるとキツネに化かされるといって、かならず二つに折って捨てたという。休憩時のオチャオケは共同仕事の場合はなかった。



第12図 カヤ束の呼称
（金子由雄解説・昭和49年）

カヤカリは、上・下に別れ、その内でカヤカリ役とカヤをマルク（たばねる）役を決めた。前者は世間話などをしながらカヤカリが出来たが、後者はカヤをマルク 1 年生のネソダケを刈る準備から取り掛かり、カヤを集めマルク仕事、その仕事はひと苦勞であった。そのため自然と年配者が、その役目をおった。

長い歴史をもつカヤカリは、各カヤバでの 1 日の仕事量が分かっていた。カリ役は仕事をやめ、カヤマルキを助け、集積場にカヤ束を 2 軒分として 2 列に積みわけ、終わると、その列の前に目印の棒を立て区別をした。

この時点で無尽を受ける 2 軒の者は家路につく。他の者は、各自のショイバシゴにカヤ 4 パを縛り、背負い、それぞれの無尽を受ける家に向かった。4 パのカヤを届けることは、このとおりカヤを刈っていますよ、という証しを示すためであったと伝わっている。

2 軒の家では勞をねぎらうために、お茶・アンコロモチ・スシ・ニギリメシなどを準備して接待した。

さらにこの後、ヒロイガヤといって無尽仲間全員で、ヤネフキ前までに 2 ダンのカヤをとどける義務があった。

3 月 31 日

☆竹代打金（内金）35 円 林蔵ニ渡ス

☆棟上ノ魚及び色々買物代 14 円 林蔵様を頼みに行ク

大正 14 年 4 月 1 日

☆家根や（屋根屋）ノ祝儀 7 円也

屋根屋組は、通常「家組（ヤグミ）」と称され、氷取沢には「ヒのヤグミ」が結成されていた。金子里吉は、その親方を務めた構成員であった。「ヒのヤグミ」から、新築を祝う祝儀がとどけられた。

★家根やと地走り

屋根葺き仕事が始まる。「ヒのヤグミ」の仲間が助人として協力した。

屋根葺きに要する日数は「四つ間型」の場合は、普通 2 日とされていた。

助人名簿に記録された方々で、（－）内は得意技を示す。

4 月 2 日も同様。

金子金蔵（仕事内容不明）

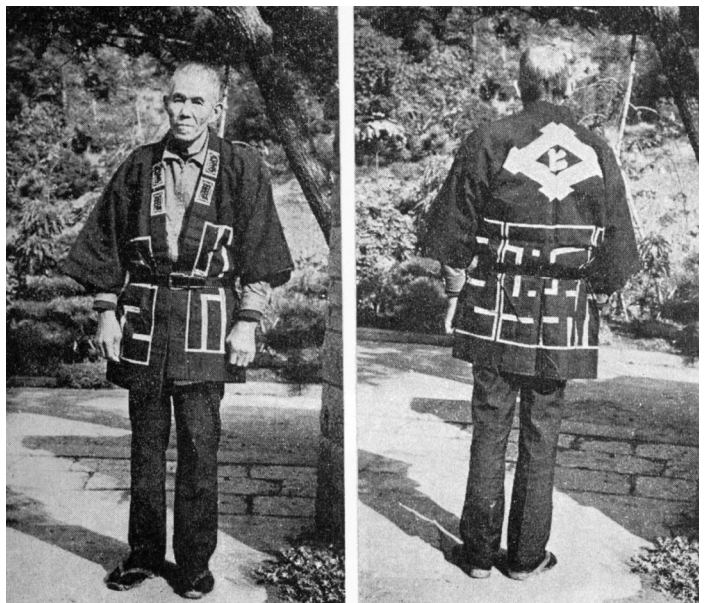
小泉藤吉（家根やト地走り）

金子権蔵（地走り）

岡本宗吉（家根やト地走り）

岡本喜代司（地走り）

岡本馬五郎（地走り）



第 13 図 「ヒのヤグミ」のハッピを羽織る金子由雄（昭和 49 年）

金子林蔵（家根やト地走り）

金子定五郎（地走り）

岡本長四郎（地走り）

岡本庫二（家根やト地走り）

岡本栄次郎（家根や）

岡本信太郎（家根や）

岡本吉蔵（地走り）	金子直左門（家根や）
野本六三郎（家根やト地走り）	甘粕竹次郎（地走り）
野本市五郎（家根ふき）	酒巻太吉（地走り）
中原：友井庄次郎（家根やト地走り）	

4月2日

☆豆腐 1円50銭

／ 905円

★家根やと地走り

2日目。事なく屋根葺きが終わると、棟上げ式がおこなわれた。

金子金蔵（仕事内容不明）	金子林蔵（家根やト地走り）
小泉藤吉（家根やト地走り）	金子定五郎（地走り）
金子権蔵（地走り・家根カリ）	岡本宗吉（家根や）
岡本喜代司（地走り）	岡本栄次郎（家根や）
岡本信太郎（家根や）	金子直左門（家根や）
野本市五郎（家かり・カタツケ）	

・屋根葺き

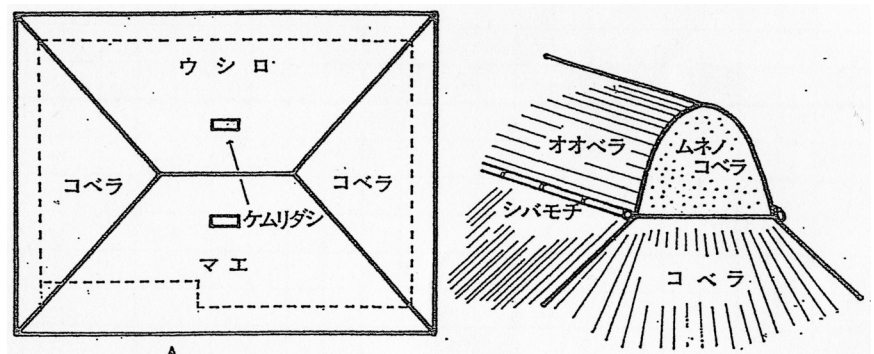
屋根葺きは「ヒのヤグミ」が中心となり、ムラ人の助人も協力して進められた。

タテマエの際に組まれた足場に、丸太を補充しながら、第14図に示したマエ・ウシロ・コベラの4面にカヤ置き場を設けた。カヤの選別をして、ふとみで長さのよく整ったカヤを選びだし、汚い葉を手でこすぎ、見た目にきれいなカヤをまとめてカヤ置き場に積み上げ、葺きクサの準備にとりかかる。

親方は、「屋根や」と「地走り」役を配置する。前者は屋根の表に、後者は屋根裏につく。屋根やはフキグサを縛るためにナワをとおしたハリボウをもつ。ハリボウはマダケの節の先を斜に鋭利に切り落とし、その面にナワ2本が通る穴を開けた道具で、葺きカヤの上から屋根裏に刺す。地走りは屋根裏でハリボウの先がヤナカの上端に出るように指示をする役目を負う。そのため両者の呼吸が合わなければならなかった。ハリボウの長さは屋根屋の身長に左右されるが、最低5尺ないと、腰がいたくなるといわれてきた。なお草屋根葺きの終焉期には鉄製のハリボウがみられた。

それらの準備が整うと、一段目（軒先）の屋根葺きが開始される。

カヤのモトの方が軒先になるように持ち、まずイッポンナラベといって軒先に隙間がでないように薄く葺き、ホソナワでタルキにからげていく。



第14図 屋根と棟の呼称（金子由雄解説・昭和49年）

お寺などの際はヨシズを用いた。新築の場合にはヤッコイ（細い）シコタケを使ったという。

この上にコムギのカラ、1コタバをイッポンナラベの上に順次しき、固定する。

その際、表面は波状となるので、その凹地にコムギのカラを入れ、平らにして固定する。この上に

ホコダケあるいは裂いた竹を横に走らせて固定する。

さらに、この上に短めのカヤを集め、厚さ5寸ぐらいにして並べ固定して行く。

これで軒先の1回目が葺きおわる。

2回目は、この上に5寸ほど軒先方向にカヤを出しながら前述同様にふく。この仕事をあと2回繰り返す。最後となる4回目のカヤは外観と、おさえ材となるため、新しいふとみのカヤを使うのが通常とされ、そのウワバの方にホコダケをわたして縄で締め上げる。これによって一段目、つまり軒先のカヤブキ仕事は終わる。一段目のカヤの厚さは2尺～2尺5寸とされていた。フキガヤの寸法は、5～6尺が勾配をとるのに楽であったとされている。

次いで、二段目を葺くために、足場材の丸太が固定される。

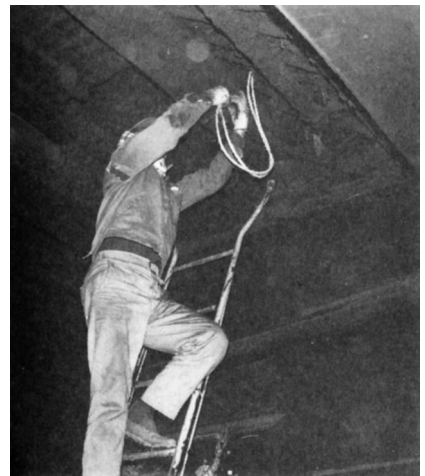
このような按配で十一段目にかかる、ケムリダシの準備に取り掛かる。マエとウシロの両面にケムリダシ（幅4寸×横幅3尺）は造られた。



第15図 屋根屋のいでたち金子正雄
(茅ヶ崎・昭和52年)



第16図 ハリをさす、屋根裏でハリにカラゲナワを通す 織茂富雄家
(南山田・昭和51年)



・棟ツクリ

棟作りは、経験からメケン（目測）によって、仕事は進められた。棟の長さは間口から奥行きを引き、それに約3尺を加えた長さとなっていた。棟の各名称は、棟はオオベラ、左右両端面はムネノコベラといわれてきた。

主屋のマエとウシロから葺きあげられたカヤのウラッポ（ホサキ）は、最終段で棟木を隠すように上天に出る。棟作りがはじまる。

ウラッポを棟木の上で1回目のクサから順次4回目までを編み上げ、棟木をおおいかくす。これによって棟のクサの基礎ができ、棟の高低差を整えるために、カヤを加えていく。

次にホコダケの径の太めのものを選び、半截してオオベラ全体に横一列に配し、最後に棟の下端部にマダケを張り付け、マエとウシロ側から水に強いアカナワ（シュロナワ）でもって棟を固定する。雨漏り防水のためシバモチやノシバ・ヤネショウブを植えた。

また棟に半截の竹ではなく、竹そのものを直接葺く場合があった。一般にいう竹棟である。竹棟の場合は、特に雨漏りを防ぐために、棟を作り上げる際に、防水の材として大量の杉皮を挟み込んだ。これらの仕事を総称してオコツリ（仕かけ）といった。

棟のコベラはカヤの断面を庭から見せるため、カヤのモトをととのえて切断し、美しい外観になる

ように仕上げた。この断面に防火のために「水」などの文字を切り込む例も知られるが、当地ではこの風俗は採用されていなかった。

・棟瓦

氷取沢でクサヤネの棟に瓦が葺かれ始めたのは昭和4～5年頃であった。

氷取沢から東北にあたる海沿いの屏風ヶ浦では、昭和のごく始めごろにクサブキの棟瓦から屋根全面の瓦葺きに変わり始めたという。そこで使用しなくなった棟瓦を融通してもらい、葺き始めたという。棟瓦は5枚が1組で、四隅には連結用の穴がつけられていた。手にいれた棟用の古瓦は、まず老人たちに託され、ワラでもって瓦を洗い、四隅の穴をクギなどを使って泥をとり、きれいに仕上げた。

その葺き方は、棟に防水用の杉皮とカヤを交互に敷き詰め、その上にソイだ（削ぐ）竹を乗せて固定する。その上に棟瓦5枚を「」字状にアカガネ（銅線）で連結して乗せ、順次棟全体を葺き固定していった。

なお、氷取沢に近い栗木の、現在の市営バス停留所栗木町付近で、昭和4年頃まで瓦が焼かれていたというが、その瓦を購入した例はなかったという。

・棟上げ式

棟が完成すると「ヒのヤグミ」は、最上段の足場からカリアゲを始めた。親方は最上段が刈り上がる頃合いを見計らって、戸主側に棟上げ式の準備に取り掛かるように声をかけた。

マエ側の1段目用に設けられていた足場材のカヤ置き場を祭壇の場にするため掃除され片付けられた。戸主はオミキ・米1升・オスワリー対・ナゲモチを供えた。儀礼は親方によって進められ、最初にナゲモチ3個にオミキをかけ拝礼し、祝詞をあげる。次にナゲモチを北・南・東・西の順に1個ずつ投げる。このあと関係者一同によるナゲモチとなった。

「ヒのヤグミ」は、ナゲモチの儀礼が終わると、順次、各段の足場材を外しながら、軒先に向かってカリアゲていった。

・家カリ・カタツケ

カリアゲの状況を常に見ている人がいた。家カリ・カタツケ役の人である。屋根全体の出来上がり具合を見ながら、修正を加え最後には片付けの指揮をとった。

・棟上げの食事と戸主のヤウツリ

戸主は、「ヒのヤグミ」の親方の指示に従い、家族を指示して、新規なクサヤネの下で、片付けをはじめた。棟上げの宴の準備である。

棟上げ式当日の食事は、昼飯はアズキメシ・オケンチン・シンコ、オチャオケは午前はサツマイモ、午後はムスビとお茶であった。夜の棟上げの宴には、飯・頭付きの魚・ニシメ・焼酎などが準備された。

宴がお開きとなった後、クサヤネが葺かれた建物の内で、戸主は一人での泊まりの準備にとりかかった。これは新しい家に魔物が入るのを防ぐためだと伝えられている。ヤウツリの習俗である。

4月4日

★小前（木舞）か起 金子林蔵

屋根葺きが終わると、土壁造りの準備がはじまる。コマイカキである。

4月5日

★小前（木舞）か起 野本市五郎

4月6日

★小前（木舞）か起 金子金蔵 金子林蔵 金子権蔵 野本市五郎

4月7日

★小前（木舞）か起 金子林蔵 金子権蔵 岡本喜代司 大工3人

4月9日

★かべ土出し 野本市五郎

4月10日

★ちょがいもうえ 岡本喜代司

・ジャガイモの種芋を植える時期は、3月中とされていた。家作で手がなく、岡本喜代司に依頼した。
助人への依頼である。

4月10日

★かべ土ねり 関彦太郎（親族）

4月11日

★佐官（左官）ノ手傳 金子金蔵（女）金子林蔵 金子権蔵 野本市五郎

佐官 2人

・造作

棟上げ式が無事に終わると、左官・大工の仕事が始まる。

戸主は左官仕事が始まる前に、助人の協力を得て、コマイカキと壁土の準備にとりかかった。コマイカキは、壁造りの仕事を意味し、まず川岸に自生するノロダケ（メダケ）を刈り、これを芯竹として壁の予定箇所等に等間隔に固定する。これにネソダケを横材として当てながら、ホソナワで縛り格子目状に編み上げた。

この仕事に前後させながら壁土を作り始める。砂めのネンド土を立方体に積み、その中央に凹地を作り水をはる。壁土としてのネバリが時間と共に出るのを待つ。2日目にはネバリがでる。ワラをオシキリで1寸5分ぐらいに切りネバツタ土に投入し、軽目のクワで良くこねると壁土ができあがった。

左官は粗塗りに取り掛かる。左官の後ろには助人が付き、左官に壁土を渡すために、手には壁土を乗せた板をもっていた。

左官は粗塗りが終わると、中塗りを始める。中塗りの土は、フルイにかけた砂と土を7対3の割にし、それに水とムシロを細かく切り刻んで入れ、ねりまぜる。ザシキから順番に塗っていく。仕上げの上塗りは、漆喰に小砂を入れた土できれいに塗り上げた。左官の仕事は終わりとなった。



第17図 助人 金子林蔵の協力記録

4月16日

☆製材費 1円 ゲヤノシキイ（下屋の敷居）

4月17日

☆酒残金 11円80銭

この酒は、祝い酒で清酒であった。

4月18日

☆佐官（左官）代 金12円

佐官ノ手傳 金子金蔵（女） 金子林蔵 小泉藤吉 金子権蔵 野本市五郎

[佐官代 金12円（ダブリ記載）] 大工 1人

4月22日

☆製材費 1円 ネダほう引く（根太の横木）

4月23日

☆仕事仕（地形関係者）15人分 37円50銭

4月27日

★大工 2人

この日から主たる屋内の大工仕事が始まる。

大工は、壁の乾燥具合を確かめてから、天井・床・押入などの仕事に取りかかった。大工の仕事がほぼ終わりに近づくと、建具屋と畳屋が入った。これらの職人の仕事によって家はできあがる。最後の儀礼、ヤウツリとなる。

4月28日

☆板 2 竹さほ 便所用材 金30円

★大工 2人

4月29日 ★大工 2人

4月30日 ★大工 2人

5月2日

☆たてぐ代 182円40銭

辰巳や シキイ ナゲシ 2寸角 中3 代金12円

辰巳やは杉田の材木屋。

5月7日 ★大工 3人

5月8日 ★大工 3人

5月9日

☆エンガワノ津か（束柱）7本引（挽く） 代30銭

ツカバシラは、縁側を支える短い柱。

★大工 2人半

5月10日 ★大工 2人デ半日 3人（不明） 5月11日 ★大工 3人

5月12日 ★大工 3人 5月13日 ★大工 4人

5月14日 ★大工 4人

5月15日

☆四分板赤一等4坪 松63坪 小物色々 代24円18銭

★大工 3人

5月16日

☆製材費 4円60銭

★大工 4人

5月17日 ★大工 4人

5月18日 ★大工 4人

5月19日 ★大工 4人

5月20日

☆8円60銭

大貫8丁 中39本

2寸角2本 杉4坪

★大工 4人

5月21日 ★大工 5人

5月22日 ★大工 5人

5月23日 ★大工 5人

5月24日

☆板2枚 3円 ★大工 5人

5月25日

☆材料製材共 24円30銭

釘代 1円60銭

★大工 4人

5月26日 ★大工 4人

5月27日 ★大工 3人

5月28日 ★大工 3人

5月29日

☆たてぐ代外3品 大貫束 松62坪 戸走ウメ木 代67円82銭

ウメ木（埋め木）は、雨戸の敷居は毎日の開閉によって擦り減るので、前もってカシの細板を埋め込み材とし、モクネジで固定補強した。

★大工 3人

5月30日 ★大工 3人

5月31日 ★大工 3人

6月1日 ★大工 3人

6月2日 ★大工 3人

6月3日 ★大工 3人

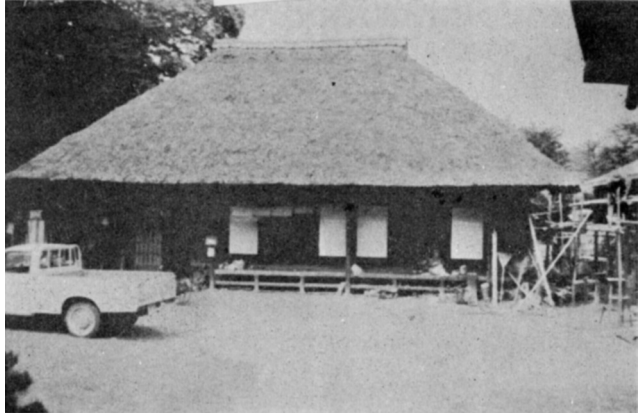
6月4日 ★大工 3人

6月5日 ★大工 3人

6月7日

・ヤウツリ

家が完成すると、一番最初に神仏を仮住まいから移して安置した。仮住まいで使用した神棚は焼却された。ヤウツリの日時は、戸主は棟梁に相談して暦を参考にして、その日を決めた。当日、戸主は家造りに関係した人々全員を招き、頭付きの魚に焼酎をつけて、大いにふるまいお礼とした。



第18図 落成なった大正14年から昭和44年までの家と棟札

招かれた人は、ココロモチ（寸志）をもって、お客となる習俗となっていた。戸主側では引出物を準備する習わしはなかったが、現在はオカエシを準備している。

復興に携わった人々

助人の協力体制と職人の出入り人数をまとめる。

ムラおよび親族の助人の人数は、延 159.5 人におよんでいる。なかでも用材の伐採と搬出・ケタカツギ・地形・立前・屋根葺きなどの日に、その大半が助人となって協力している。それらの日に特に労働力が必要であったことが知られる。

氷取沢には「ヒのヤグミ」とヤネ無尽があったとはいえ、この記録は、かつてのムラ人の協力体制の姿を顕著に示したものであるといえる。

職人は、大工は延 220 人、仕事師は 14+ ? 人、木挽 22 人、左官 20+ ? 人、建具・畳屋 ? 人である。

総延べ人数は、約 457.5 人を数えるが、食事などの準備に係わった人数は算出できない。数字以上の人々の援助によって金子家は完成した事が知られる。

おわりに

大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災に罹災した金子里吉家は、同年 9 月 25 日復興に向かって第一歩を踏み出した。同 14 年 6 月 7 日のヤウツリによって、各種の工程と儀礼をおえ、主屋は完成をみた。屋根裏には棟梁が揮毫した棟札がかけられた。

当時 10 歳で日下小学校に通学していた金子由雄の回顧のなかに、親父は「ヒのヤグミ」の仲間であった。冬季の屋根葺き仕事の際には、家々の構造体を見て、研究をしていた。被害を受けたわが家を、いかに再建するか、小学生であったわたしにも親父の気持ちが伝わってきた。親父が毎日の事柄を書き留め、柱にぶら下げていた日記帖を、今に読むに、人々との繋がりがいかに大切であるかを教えられると共に、当時の親父のあつい心が胸を打つと語ってくれた。

〔註〕

- 1 「今村式 2 倍地震計」地面の動きを 2 倍に拡大して記録する低倍率の地震計。関東大震災で、ほかの地震計が計測不能に陥る中、東京の激しい揺れを唯一記録したことで知られる。『No.38 世界の博物館 国立科学博物館』朝日新聞出版 2012 年
- 2 「地学」『理科年表 平成 24 年』丸善出版株式会社 平成 23 年
- 3 1923 年（大正 12 年）の報告 『《復刻》横浜歴史年表』白話社 昭和 48 年
- 4 『横浜の町名』横浜市民局総務部住居表示課 平成 8 年
- 5 加太こうじ「たばこ」『値段の明治 大正 昭和風俗史』下 朝日新聞社刊 昭和 62 年

〔元横浜市歴史博物館学芸員〕